

サビエル生誕五百年



巡礼の道

334

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

ボランティアの仕事

被災地ボランティア記⑤



ギターも加わり、ハンドベルの演奏に涙する人もいた

東日本大震災直後、全国から大勢のボランティアが被災地を訪れ、ヘドロやがれき撤去に汗を流した。このニュースを見ながら日本人という国民の素晴らしさに胸を熱くした。そして自分の信仰を顧みながら、信仰は知識ではなく、行い、生活である」とボランティアに参加した人たちから学んだ気がする。被災から早や二年になろうとし、ボランティアの仕事の内容も変化している。

ガレキは表面的には処理され、被災者は仮設住宅に住み、肉体労働はほとんど必要なくなった。かと言って、ボランティアが不要かといえはそうではない。現地を訪れてみ

て、被災者が外見（例えば以前のよう自分家に住める）だけでも被災前の状態になるのはまだ相当の時間がかかると感じた。

特に阪神淡路大震災に比べても住宅復興は大幅に遅れている。苦しい長い仮設住まいが続く時、自分たちは見捨てられていない、支援してくれている人がいるということは被災者の一つの心の支え、希望になる。

私事で恐縮だが、何

てもらえると本当うれしい。

私は気が沈んだ時、マザー・テレサのことを思い出す。「人間のほほえみ、人間のふれあいを忘れた人がいます。これはとてもとても大きな貧困です」物質的な貧しさも苦しい。しかしもつと苦しむのは自分誰からも必要とされていないという孤独感ではないだろうか。

「一切れのパンではなく、多くの人は愛に、小さなほほえみに飢えているのです」

大槌ベースキャンプ・ベース長の古木神父はどの支援キャンプもボランティアの数は最も多い時に比べ、十分の一ぐらいに減ったと言われる。その理由は①



集会所で「お茶っこサロン」開催を知らせるのぼり

時とともに風化し、関心が薄れた②講堂などでの避難生活から仮設住宅に移り、ボランティアは必要ないと思う人が多い③今、どんなボランティアをすればいいかわからないなどが挙げられる。

日間（往復二日は除く）で、三カ所の仮設住宅を訪ね、残りの一日は学童保育の手伝いをした。

長期化する仮設住まいでどのような支援が必要かをどの支援団体も模索しているように思える。我々の団長、柴田神父は何度も現地を訪れる中で、今回は手品、ハンドベル、ビンゴゲームなどの慰問余興軍団をつくることにし、被災者に笑いを届け、さらに山口県らしくふぐ雑炊や手づくりのケーキをプレゼントした。

今、ボランティアの活動の中心は「お茶っこサロン」と呼ばれる、仮設の集会所での被災者のケア、慰問が中心である。我々も四



86歳のカンガス神父の手品の熱演